

なぜ『OUT』か？—時代を先取りする女性文学の力

お茶の水女子大学 菅 聡子

イタリアと日本、両国の女性のアイデンティティ、状況について比較考察をしようという日伊女性国際会議において、なぜ、桐野夏生『OUT』が議論の対象として選ばれたのだろうか。—このような素朴な疑問は、この会議に参加した多くの聴衆によって共有されていたのではないかと思う。もちろん、具体的には、2003年に本作が“Le quatttro casalinghe di Tokyo”（東京の四人の主婦）というタイトルでイタリアでも刊行されたという背景がある。とは言え、なぜ『OUT』なのか。

桐野夏生はいまや、村上春樹とならんで、国際的に多くの読者を獲得している代表的な現代日本文学の作家の一人である。『OUT』は、1997年に講談社より刊行され、98年に第51回日本推理作家協会賞を受賞した。四人の主婦の犯罪、すなわち一人が夫を殺害し、ほかの三人がその死体をバラバラにするというショッキングなシーンで始まるこの作品は、彼女たちの閉塞した日常を通して、日本社会の現実を鋭く描き出している。またたくまにベストセラーとなったこの作品は、2003年にアメリカで英語版が出版された。ペーパーバックではない、単行本としては異例の売れ行きであったそうだが、それがそのリアルで力のある内容によるものであることは、たとえば「ワシントン・ポスト」紙が「日本女性のステレオタイプを打ち砕きながら日本社会の暗部を描いた」と評したことにも明らかである。そして2004年、アメリカミステリー界のアカデミー賞とも称せられる、アメリカ探偵作家クラブ主催の「エドガー賞」の最優秀作品賞の最終候補4作の一つに選ばれた。日本人作家としては初の快挙である。

このような作品をめぐる国際的評価は言わずもがなのことだが、『OUT』の持つ作品としての衝撃力は、当日の桐野夏生氏とBelotti氏の対話によってより明確にされた。以下、両者の対話によってインスパイアされた私見を述べて、本会議の報告にかえたい。

あらためて、「ワシントン・ポスト」紙の評言、「日本女性のステレオタイプを打ち砕きながら日本社会の暗部を描いた」を思い起こしたい。「日本女性のステレオタイプ」、ここからは、従順な良妻賢母という旧来の伝統的日本人女性イメージが、いまだに「ステレオタイプ」として流通していることがうかがわれる。だが、日本国内においても、『OUT』は女性たちをめぐる「ステレオタイプ」を粉碎した。それは「主婦」をめぐるステレオタイプである。『OUT』が前景化したのは、家事・育児などをこなしながら、さらに「パートタイム」に従事している、社会構造でいえば下層部分を形作り、それゆえにこれまで不可視のものとなっていた「主婦」たちの姿である。加えて、家庭内においては家族は崩壊し、彼女たちは誰ともつながることのできない深い孤絶感を生きている。本作発表当時、マスコミがもてはやしていたのはキャリアを持つ女性たちか、あるいは雑誌『VERY』等が煽動した優雅でセレブな「専業主婦」たちであって、現実の「主婦」たちの非正規雇用の問題はまったくと言っていいほど可視化されていなかった。実際、本作が発表されたときも、男性読者の関心は「主婦」たちによる夫殺しに集中し、その根底にある彼女たちの日常の閉塞感とそれゆえの絶望はほとんど見過ごされていた。

しかし現在、日本社会が経済的な格差社会としての相貌をあらわし、そのなかで人々の心が病んでいくさまを目の当たりにしてみると、『OUT』がいかに先駆的なまなざしで日本の現代社会の行く末をみすえていたかに驚かされる。10年前、『OUT』が見出していた「主婦」たちの閉塞感は、現在の日本において、「主婦」に限定されないあらゆる世代の人々にとっての問題となって

いる。出口なしのこの閉塞感からどのように脱出するのか。社会生活の外部に位置すること、すなわちこの社会から〈OUT〉することによってだろうか。実際、『OUT』においては、中心的人物である香取雅子がまさに社会から〈OUT〉することによって、自らをとりまく閉塞感・絶望から〈OUT〉しようとする。そのプロセスはいささか現実離れしており、ある種のファンタジーとも言えるような描かれ方である。しかし、この〈OUT〉にいたるプロセスを「ファンタジー」として描いている点にこそ、『OUT』の真実がある。「ファンタジー」以外に、この閉塞感から抜け出す方法は現代日本社会には存在しない。ここにこそ、女性作家・桐野夏生の厳然たる現実認識があると言えよう。

『OUT』から10年余り、女性たちの生はどのように変わっただろうか。政府がようやく社会的弱者の救済に目を向け始めたのはごく最近のことである。政治が後手後手にまわるのに比して、文学はつねに現実を先取りする。かつて、犯罪の若年齢化に直面して、「14才」という年齢がキーワードとして語られたことがあった。しかしそれよりはるかに早く、三島由紀夫は『午後の曳航』を書いていた。文学と社会の連関は、まさにこの予言性にあるのである。